

## 近畿病院図書室協議会第113回研修会 (事例・研究報告会)

研修部

日時：2007年3月23日（金）10：00～12：00

場所：コープ・イン・京都

プログラム：

1. 蔵書構築班2006年度研究活動報告

演者：藤原純子氏（洛和会音羽病院）

共同演者：佐藤道子氏、中谷洋子氏

2. 国外における一般市民への医学情報提供の現状（文献的考察）

－医学図書館による公立図書館への指導－

演者：若杉亜矢氏（松下記念病院）

共同演者：神山貴子氏、山室真知子氏、杉本節子氏

3. 図書館員の専門性に関する文献研究

演者：寺澤裕子氏（関西労災病院）

共同演者：山室真知子氏、中村友紀氏

4. Kinki Webcat の使い方

－目録サポートチームからの紹介－

演者：神山貴子氏（京都桂病院）

共同演者：山室真知子氏、春日井泉江氏、西村和代氏、林 伴子氏、藤原純子氏

5. 病院における仮想患者図書室をさぐる

－事例を参考に－

演者：松本純子氏（住友病院）

参加者数：38名（会員32名、会員外6名）

今回の事例・研究報告会には5題の演題が寄せられた。うち3席は研究助成制度を利用した研究成果の報告であった。

第1席は「蔵書構築」研究班からの第112回研修会での発表に引き続いての報告であった。今回は特に選書に重点をおいた内容であった。アンケート結果からもわかるように、選書基準

のない施設が多く、リクエストに頼った蔵書になっている傾向がうかがえた。2007年度の活動計画として、基本図書を選書ルールに基づいて評価を行うことがあげられた。今後は、研究班から発信される情報を参考に、自信を持って選書にあたる、あるいはアドバイスできる図書館員を目指したい。

第2席は「国外における一般市民への医学情報提供の現状（文献的考察）」研究班からの報告であった。この研究班では各研究員が関連文献を検索し、翻訳、検討を加えてきた。今回はその中から選んだ文献についての詳細な内容紹介で、1969年当時から今に至る医学図書館の歩みを視野において展開されてきた活動が理解できた。海外では健康情報についての一般市民への提供が当たり前のこととして行われている。日本での現状との乖離が今更ながら感じられた。

第3席は、2005年度からの継続研究である。前回の報告会では、アンケート調査から見られる病院図書館員の現状が報告されたが、今回は病院図書館員の専門性に重点を置き、文献研究を行った結果報告であった。日本ならびに海外での図書館員養成の歴史をふりかえり、専門職に関する数多くの研究についての紹介とともに、当協議会の現状も年次統計をもとに報告された。専門職としての社会的認知を得るためにも、名称付与制度の活用などが検討課題としてあげられた。2007年度も継続して、病院図書館員の標準的な姿を見出すための研究活動を行う予定とのことであった。

第4席は、2006年度に稼働した、近畿病院図

書室協議会所蔵目録 Web 版 (Kinki Webcat) を円滑に活用するために立ち上げた、目録サポートチームによる Kinki Webcat の使い方の紹介であった。稼働によって、会員間での所蔵館調査は簡便になったが、一方で、データの不備などのトラブルシューティングを必要とする場面が散見されるようになった。基本的な使い方についての紹介は研修会などで何度か行われたが、今回は具体的な事例を挟んでの説明であった。Kinki Webcat では各会員機関によるデータ修正・更新が必須である。文献の相互利用は、当協議会の基本的事業である相互協力活動の一つである。今後、文献の相互利用の促進を目指し、データメンテナンスなど目録サポートチームの担う役割は大きい。

第5席は、病院機能評価 Ver. 5 受審時に経験した「患者図書館」の扱いを踏まえて、現在機能している患者図書館の紹介、ならびに院内

でのアンケート結果が報告された。サービス内容の違いやサービス主体別など、タイプ別に4病院の事例が紹介された。いずれも有効利用されているのがよくわかった。院内アンケートでは患者サービスの一環として、必要性は認めるものの、場所や予算面から患者図書館を院内に設置することへの危惧がうかがえた。

2006年度の事例・研究報告会では、研究班からの発表がいずれも病院図書館と他の図書館との協力活動、特に公共図書館との連携に課題を見出した内容だったように思う。フロアからの質問、意見の中にも、昨今の公共図書館による医学医療情報提供サービスに言及したものがあつた。病院図書館司書として、今後の進むべき方向を模索している担当者は数多いことと思うが、今回の研究発表が何らかの参考になればと考える。

(文責：林 伴子／社会保険神戸中央病院)